

# ●白州だより

2011年4月5日  
二十四節気 清明  
発行 白州郷牧場  
山梨県北社市白州町横手 2259  
TEL: 0551-35-4520  
FAX: 0551-35-2970

白州郷牧場からの春のおたよりをお届けします! <http://www.hakusyu.jp/> [info@hakusyu.jp](mailto:info@hakusyu.jp)



## 「東日本大震災」

椎名盛男

### 計画停電

計画停電がはじまって、私たちはこんなにも原発  
漬け、石油漬けになっていたのかと、つくづく思っ  
た。停電になると何もかもが動かない。暗闇の中、  
本も読めずにじっとしているしかない。石油と原発  
がなければ生産活動も暮らしも成り立たない。

昔、誰かが言った。「どんな政権もその国民の質  
を越えることはできない」と。ならば、国民の質を  
越えた文明もないのだろう。照明が点灯した瞬間、  
人々は骨身に沁みて現代文明のありがたさを知るの  
か、それとも二度と原発を許さず、石油文明（象徴  
としての原発、石油依存電気）、現代文明からの脱  
却という未知の道を模索するか、私にはわからない。  
人間の欲望の通りやすい道を「文明」と名付けるの  
なら日本人は、アメリカに倣ってパンとサーカスの  
ローマ市民のように私心の道を歩んできた。それが  
民意であり、民意を天意として来たのだから、今回  
のふたつの災害は、天から裁かれたとも言えよう。  
私たち日本人は私心にあふれた民となり、被災地ば  
かりでなく全員が断罪された。断罪を知って、はじ

めて私たちは気づくのかもしれない。「願いは天に  
届かず、広い地に自分の居場所はなく、道は続くが  
帰る家はない」と。ふと思う。ネアンデルタール人  
にも私心はあったのか、と。

### 20世紀と21世紀の境目

白州は長野県と山梨県の県境にある。車で10分  
くらいで長野県である。私は県境に行き、中部電力  
所管の長野県を見た。そこには煌々と灯りがつき、  
店は開かれ、20世紀の文明がそこにあった。私は  
暗闇の21世紀にいる自分に気づいた。ああ、ここ  
が20世紀と21世紀の境目だと思い、境目につい  
て書いていた福岡伸一さんの言葉を思い浮かべた。  
境目から新しい何かが始まる、というような内容  
だったと思う。

### 震災

11県にも大震災と津波は襲った。被害は甚大で  
ある。しかし、テレビを観ていると、「この広大な  
東北被害地のGDPは日本全体の7%弱であるから  
日本経済はびくともしない」と御用学者は言っ  
てのけた。問題は金ではない。今度の二つの災害は、持っ

ている 1000 円から 70 円を落としたというよう  
な話ではない。

結局、政府は情報を小出しにし、その情報に国民  
が慣れた頃、次の情報を出すように順知させる（段々  
に危機に慣らさせる）という手法を繰り返し、ゆで  
蛙のようにしていくのだろう。彼らは立法府の名に  
おいて、食べ物の安全基準を段々と下げていった。  
10～15 年は問題を先送りにし、当事者たちが死  
に絶えるのを待つ。そして、自分の家族には食べさ  
せない。

敗戦時、戦争に予算をつけた官僚はその責任を問  
われ、こう言った。「私にもかわいい妻子がござい  
ますから」と。今度もそうだろう。

## 原発

原発の 20km 圏内の人は、自宅に戻る日を夢  
み、指折り数えているようだ。老夫婦一代の始末な  
ら、それはそれでひとつの選択だ。だが、子孫たち  
のことを考えるのなら、二度と故郷には戻れまい。  
結局、政府は、被曝野菜を食べるしかないように国

民を追い込む。安全基準をあげ、資本は労働分配費  
を下げ、小売業界は背に腹は代えられないというこ  
とになる。わたしは生協もそうなるのでは、と危惧  
している。ならば、団塊の世代の年金は、放射能を  
浴びた野菜を現物支給し、農業を支えるべきである。  
枝野官房長官と御用学者たちは、被曝野菜はただち  
に健康に影響がでないといっているのだから、立法  
化できないことはないだろう。

癌になるにしても 10～15 年後だろう。その頃、  
彼らはもうどうでもいいたろう。そして、こういう  
国を作ったのも彼らである。

手塚治虫の「鉄腕アトム」をみるだけでもわかる  
が、かつて原子力は、夢のエネルギーだった。しかし、  
こうなってみると、原発は神に触れたのだと思うし  
かない。企業は社会的責任がある。ならば、仁義を  
まっとうするしかない。政治は国民の安全を第一と  
するべきだろう。だが、この国は、私たちを含めて、  
人間が第一ではなく、金儲けが第一となってやって  
きた。神はやはりいるのだ。

散る桜。残る桜も散る桜。合掌。



## ～フィリピン・ネグロス島、カネシゲファーム訪問の報告と感想～



内藤 光 (26 歳)

まさかヤギに起こされるとは思わなかった。カネ  
シゲファーム・ルーラルキャンパス (KF-RC)  
での朝のことだ。前の晩に遅くまでラム酒を飲んで  
いたので、ぎりぎりの時間まで寝ているつもりだっ  
たのだが、ヤギたちはそんなことお構いなしに壁一  
枚を隔てたところでメェ～メェ～と鳴いている。カ  
ネシゲの朝はとにかくにぎやかで驚いた。人がさわ  
がしく動き回っているのではない。ヤギに鶏やアヒ

ル、牛に豚がのど自慢をしあうように騒いでいるの  
だ。まるで動物園のような場所だが、あくまでここ  
は農場で、若い研修生六人が畑の管理や動物の世話  
をまかされている。彼らはここに農業や畜産の技術  
を学びにきている。

KF-RC の牧歌的な風景からは想像もできないが、  
ネグロス農民の歴史は重くて暗い。スペインに植民  
地化されて以来、農地のほとんどは輸出用のサトウ  
キビ栽培にあてられてきた。大半の島民たちにとっ  
て、プランテーションでサトウキビ労働者として雇  
われる以外に生計を立てる術はなく、その一方で、  
農地を独占する地主階級は裕福な生活を謳歌してい  
た。1985 年に砂糖の国際的な取引価格が暴落す  
ると、サトウキビ労働者たちは職を失い、飢餓状態  
に陥ることになる。食料を作るための土地がなかつ  
たのだ。農地解放を求める新人民軍のゲリラ活動が  
台頭し、一時内戦状態にまで混乱は達する。山間部  
の農村は国軍の掃討作戦で破壊しつくされ、多くの  
国内難民を出すことになった。





今もなお、ネグロス島の農地は完全に解放されたわけではないのだが、徐々に農民のものへと  
なりつつある。しかし時代の流れなのだろう  
か、農業に関心を向ける  
人の数は

## 「ネグロスの豊かさについて」

そう多く  
はない。ネグロス島の州  
都、バコロドには大型ショッピングモール  
が次々と建てられ、米国のコーヒーショップや日本  
車の販売店がそこかしこに軒を連ねている。人々の  
関心は、農村よりも都市に、生産よりも消費に向け  
られている。若い世代にとって、畑であくせく働く  
なんて「時代遅れ」であり、「貧しい」ことなのだ。

しかし、「豊かさ」も「貧しさ」もそんなに単純  
なものではないと思う。少なくとも、商品の洪水  
の中に身を浸して生きることが、「豊か」だとは  
絶対に思えない。日本では当たり前のトラクターや  
管理機といった農業機械は、KF-RCにはない。し  
かしそこにいる人々は、「無いものねだり」をする  
こともなく、そこにある自然の力をうまく利用しな  
がら生きている。豚舎からでた糞尿は畑の肥料にな  
るだけではない。それを発酵させるプロセスで出る  
メタンガスは、調理用のガスコンロの燃料として利  
用されている。KF-RCにはこうした自然の力を利  
用した技術があちこちにある。

ここにきて痛感させられたのは、お金がなければ  
「豊か」になれないのではなく、私たちはすでに自  
然から多くの恵みを受け取っている、という当たり  
前の事実である。そのことにちゃんと気がついてい  
ないだけなのだ。近い将来、KF-RCの研修生たち  
こそが新しい「豊かさ」のモデルとなるに違いない。  
そのとき、彼らの両親が勝ちとった大地は、もっと  
もっと肥沃になっているはずだ。



白崎 森夫 (19歳)

視察研修ということでカネシゲファームに行っ  
て来ました。

動物の種類の多さにまず圧倒されました。鶏だ  
けでなくアヒル、アイガモに七面鳥。そして山羊、豚、  
水牛。養殖池ではティラピアという魚もいました。

豚に一番力を入れているようで豚舎には二十頭ばかりの母豚と数十頭の子豚がいました。中には昨日生まれたばかりという子豚も。豚舎はとても綺麗で臭いも全くありませんでした。それもそのはず、毎朝6時に必ず掃除をしているとのことでした。

研修生の一人ひとりが子豚を二頭ずつ飼育しています。そしてカネシゲファームを卒業すると家に連れて帰ることができます。そのためみんな子豚を大変かわいがり、各自工夫を凝らして飼育しています。中でもポルドー君の実家では、配合飼料は与えられないということで（カネシゲファームではヌカなどで作る配合飼料を豚に与えています）それを使わずに自分たちの残飯を子豚が食べやすいように加工し与えていました。

掃除や餌やりだけでなく、人工授精や雄の子豚の去勢、出産の立会いなどあらゆることを彼らだけでしていました。人工授精は特に難しいらしく、通常一回の出産では十二、三頭生まれるのですが、最初は六頭や八頭だけということが続いたようです。しかし、今ではしっかりと十二、三頭生まれるようになったそうです。弱った子豚が生まれた場合は、自分の寝床に連れて行きミルクを与えるという話も聞きました。

そのような話から彼らの家畜に対する愛情などがとても伝わってきました。



土橋 貴法 (19歳)

私は2月にフィリピンのネグロス島に行ってきました。私はフィリピンは初めてで、フィリピンのイメージは少し怖い所というイメージがありましたが、ネグロス島の人々は、みんな、あたたかくとても明るくとてもいい人ばかりでした。ほかにフィリ

ピンに行って感じた事や、思ったことがたくさんあり、とてもいい経験をさせてもらいました。

一つ目は、ネグロス島にあるカネシゲファームでは、私たちがあたりまえのように使っているトラクターや草刈り機といった機械がなく、土と耕すときは水牛を使ったり、すべての作業を機械を使わないでやっていました。私は機械をほとんど使わないカネシゲファームの人達に衝撃を受けました。

カネシゲファームではさまざまな畜産をやっている



ました。そのなかでも鶏はとても衝撃的。鶏の種類がたくさんいて、ネグロスの地鶏や、七面鳥やスイギニア、アヒル、合鴨、これらの鶏達がなんの仕切りもないカネシゲファームを楽しそうに、走り回っていて、鶏達にストレスもなく、伸び伸びとしていて、とても楽しそうでした。

ほかに、カネシゲファームには、60頭近くの子豚がいて、私達がカネシゲファームに行った日は、ちょうど生まれて31日の子豚の去勢をする時でした、最初はジョネル君という豚専門の人の、お手本を見せてもらいましたが、豚がとても痛そうな鳴きかたをしていたので、私はすこし怖くて、あまりやりたくありませんでしたが、せっかくの貴重な経験なのでやらしてもらいました。

カネシゲファームの人たちは、ほとんどが私と歳が近い人ばかりでした。日本ではあまり、私と同じ歳の人と農業や畜産といった共通の話ができなかったので、私はとてもうれしかったです。これをきっかけに、これからも交流してお互いにもっと頑張りたいです。



坂田 裕美

カラフルなジープニー、バイクをこく浅黒い青年、見慣れない植物、トヨタの車、多くの若者、アメリカンな看板、クラクションやざわめき…

ネグロス島はバコロド市。到着して現地でお世話になるアンボさん、大橋成子さんの話を聞きながら次々と目に飛び込んでくる風景。かれこれ12年前に訪れたときより空港も街も発展して驚いたけど人々や街から発せられる熱気は当時感じたそのものを思い起こさせていた。

今回のネグロス島で、農業者のはしくれとしての目線で見聞できてしあわせだった。たくさんの方が頭の中で今もぐるぐるしている。

カネシゲファームでは10代の若い研修生達に出会った。自ら自分達の現場を案内してくれたり、一緒に豚の去勢(!)を教えてくれたり、カラバオ(水牛)を教わりながら畑を耕した。都会での暮らしに疲れて田舎に戻ってきた子、親に勧められて農場に来た子、彼女に振られちゃった子もいたなあ、みんなそれぞれ得意なことや担当が決まっていた。研修を終えると実家へ戻り、農業をはじめ。害虫の話や土の話、豚のこと、気候や設備は違えど、畑での悩みは似ていたりもして、海を越えてこんな話が交わされて楽しかった。

エイドファンデーションでは「適正技術」という考え方とそれを生み出している現場に出会えた。立ち上げたオーキさんに案内してもらったモデル庭園に知恵の集合体を見た! 技術を摘要する現地の生活に見合い、しかも低コストですぐに手に入れられる原料やシンプルなくみで、電気や水の供給ができる装置をいくつも見せてもらった。ネグロスだけではなく、フィリピンの各地、海外にもその技術の輪

は広がっていた。土着のモノを活かすことでいえば、BMW技術もその精神が流れていて素敵なことだと思う。

ネグロス島で農業をしていくということは日本に比べれば骨の折れることが多い。灌漑設備も十分ではないし、機械も簡単には手が出ない。なにより農地解放がいまだに行われていなくて自分の土地で好きなものを栽培できる人が半数しかいない。土地の問題で地主との闘争でいくつも奪われた命の歴史も聞いた。

そんな中での、カネシゲファームやエイドファンデーションの取り組みは希望のひかりだと感じた。農業で稼いでずっと暮らしてゆける。楽しい暮らしを営むための光だ。この先の未来へずっとずっと続いてゆく光だ。そしてそれは日本の農業者・若者に



とっても心に留めておきたい光なのだと思います。

誰にでも分かるようにとか、誰かと気持ちを共有したいとか、相手の目線になるとか、自分以外の誰かとの関わりを面倒に思っていたら生活は続かない。カネシゲファームのメンバーやエイドファンデーションの革命魂に人と人のつながりを見た。「今回の交流を最後にしたくない」カネシゲのみんなから頂いた言葉がうれしくてたまらなかった。

便利になりすぎて与えるだけ、受け取るだけが身近にも氾濫していて、自殺者が毎年3万人もいる日本はどこへ行ってしまおうのだろう。もっともっと気持ちをオープンにして楽しくアタマを使わないとな。

私は地球で生活をするひとりとして、つながりたい。

## 「食事のあり方について」 見田 由布子

～白州郷牧場で働く皆さんへ～

このたびの福島原発事故における放射線物質による汚染が、野菜・畜産物・水道水にまで広がっています。

日本では、現在 54 基の原子力発電が稼働し、他にも一基は建設中、十四基が予定されているそうです。

キララの季節の学校での岡山大学地球物質科学研究センター准教授、奥地拓生さんの講座によって、私たちは、動いている大地、沈み込み競争あがっている四つのプレートの上に、日本という国土が成り立っていることを知らされてきました。

しかし、人知では制御できない原子力によるエネルギー依存から脱しきれず、今日も 3 月 11 日以前と同じように、原発に対する政策は変化していません。

最悪の事態を免れたとしても、長引く汚染・罹患の危険性は回避しきれないと考えます。

以下の、情報に基づき、私たちの一つの防御手段として食事のあり方を決めることとしました。

「一般人の対処できる範囲として、『ビタミン』『ミネラル』を多く含んだ食品を常に摂り続けて、排泄

し続ける事があるようです。

長崎の原爆では、それによって爆心から 1,8 km の所で被爆した医療関係者たちが、全員、原爆症が発症しなかったとの記録もあるとか。

一般には、玄米・わかめ・昆布・味噌など、ミネラルとビタミンを多く含んだ食品が挙げられています。

(～中略～)

また、放射線排除の実験結果もあり、動物実験では効果があるようです。」

(国立天文台・牧野氏の HP より)

以下、徹底することを切望します。

- 1、毎日、味噌汁・漬物・店の五分搗き米と古代米のミックスご飯を食べる
- 2、スーパーやコンビニでの食品の購入を控える
- 3、研修センターの生物活性水を飲む、ポットに入れる一私たちの BM プラントには、麴・昆布・鰹節・卵の白身と殻が大量に吊るされています。通常の上水の数百倍のミネラル・ビタミンが溶け込んでいます。

くれぐれも「自分自身を大切にするように」との椎名社長からの指示です。

(2011.3.24)

## 「安全な水」をお届けします



東日本大震災と福島原発事故の影響で、現在、安全な水が入手困難という報に接しています。幸いに白州郷牧場グループでは二本のボーリング井戸（深さ 60m）を持っています。わたしたち白州郷牧場は、水の支援を決定しました。

・山梨県北杜市「おっぼに亭こっこ」に汲みに来られる場合

ペットボトル等をお持ちください。

・郵送の場合

容器代と送料、代引き手数料はご負担くださ

い。

例．(東京地域の場合) 450 円+ 500 円+ 315 円 = 1265 円

・郵送の注文の仕方

FAX (0551-35-0132) もしくは、メール (info@hakusyu.jp) にて、

1. お名前 2. 住所 3. 電話番号  
を記入して申し込んでください。配送日と時間の指定はできません。

水量は、1 回の申し込みで 20 リットル容器 1 箱とさせていただきます。